

未公開の船ヶ谷式土器群をめぐる基礎的研究(2) — 標式の浅鉢群を対象とした新たな視点と再検証 —

幸泉満夫・奥田七夏・笠木聖郁・畑中志穂・白鳥 嶺

1. はじめに

本誌第24号(以下前号)において、筆者等は、全国的に著名な松山市船ヶ谷遺跡出土の船ヶ谷式標式土器群に対する、地元ならではの貢献を標榜し、その未公開資料群に対する基礎的成果の公表を開始した。このうち前号では、主に粗製深鉢群を対象とした成果を公表し、幾つかの新知見を披露している(幸泉・岩田・奥田・白鳥・近藤2020ほか)。本稿は、その続篇を意図して綴るものである。

当該期における広域土器編年の指標として、船ヶ谷遺跡出土の浅鉢資料群は、常に西日本全域で重視されてきた¹⁾。西部瀬戸内周辺における縄文時代晩期中葉(または晩期後半)の指標であることは無論、後続する刻目突帯文の成立に関与する時期だけに、編年交差上、特に学界で注視されてきたためである。けれども、出土浅鉢群の全貌は未だ明らかにされていない。船ヶ谷遺跡は遺物の包含密度が高く、出土量が膨大であったため、図示公開される資料がごく一部分に限定されてきたことがその理由である。このため、編年上の位置付けは未だ不十分なままであり、単に瀬戸内地方のみならず、我が国の弥生時代早期成立段階の様相を考究するうえでも、少なからず支障を来してきたといっても過言ではない。将来の研究進展に向け、まずは徹底した標式資料群の図示公開こそが求められよう。

そこで第二弾となる本稿では、未公開の船ヶ谷式浅鉢に対する積極的な追加公開を目的とした²⁾。併せて、本稿の後半では船ヶ谷式浅鉢に関する製作技法上の特質等についても、若干の考察を試みることにする。

2. 未公開浅鉢群の現状と型式分類

対象資料は報告が1975年と比較的古いため、A・Bランクの報告資料群とCランク以下の未公開資料群が未分離のまま、県文化財保管庫で一括収納されてきた(写真1)³⁾。個々の資料の出土層位等については、注記情報を頼りに主に学生間で集計を行った。結果は「第3(またはⅢ)層上部」(報告書の第Ⅳ層)が圧倒的という知見程度に留まっており、前号同様、資料群の年代差等を出土層位から復元することは叶わなかった。また、一定の同一個体片を含むと想定されるが、確実視できる個体は稀である。そのため、全ての土器片の実測を目指すこととした。

以下、幸泉が縄文後期後葉～弥生早期前半までを対象に作成した第1図の分類基準に基づき、(1)玉縁口縁短頸屈曲形(第1図c下段)、(2)玉縁口縁長頸屈曲形(第1図d中段)、(3)長頸鐘形口縁形(第1図d⑩～⑳)、(4)胴張浅鉢(第1図i下段)、(5)素口縁一段屈曲形浅鉢(第1図h①～⑤b)、(6)皿形浅鉢(第1図j)、(7)逆く字形浅鉢(第1図h⑤cd、ならびに口頸部内縁



写真1 未公開船ヶ谷資料の選別作業風景

がやや肥厚する i ⑫~⑬)、(8)粗製のボウル・ナベ形の一部(第1図 j)の順に、各々の観察所見を記していく。

(1) 玉縁口縁短頸屈曲形浅鉢

第2図は玉縁口縁短頸屈曲形浅鉢に属する未公開口縁部片を集成したものである。小片が多く、8のように頸部長とその弯曲具合、および肩部屈曲に至る形態の全てを把握できる個体は稀である。

内縁の玉縁肥厚については幾つかのバリエーションが窺えることから、型式細分の指標となり得る。

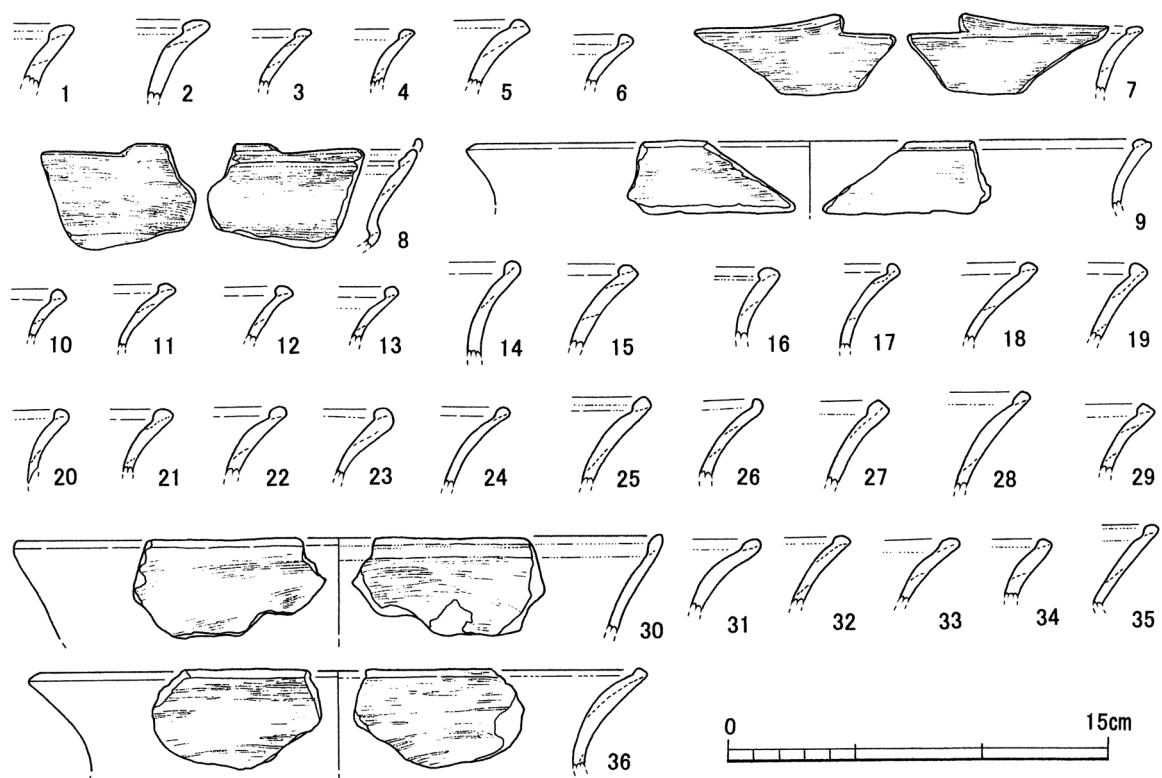
うち第2図1・2のように断面が幅広で明瞭な直角三角様を呈する例は、当該一群の最古相である(c ⑮a形)。もっとも、数的には極めて少ない。隣接する岡山県域に関する平井泰男の編年では、晩期中葉中段階の岡山県Ⅳ期と併行しよう(平井2009)。概ね黒川式中段階、幸泉のStage22に帰属するとみてよい(幸泉2017・2020abほか)⁴⁾。

第2図3~8は、直角三角形様を維持するものの内縁肥厚が相対的に弱まり、幅狭化する一群である(c ⑮b形)。7・8には鰭状突起が付随する。第2図9~24は上記3~8と肥厚具合が類似するが、その断面形が下弦連弧の蒲鉢形(いわゆる玉縁形)へと変容した一群である。玉縁形状は明瞭であり、その下縁が鋭い鋭角の稜線を成す古相の c ⑮a形(第2図9~19)と、肥厚

a 内折ボ	 ①	 ②	 ③	 ④	 ⑤	b 多段ボ	 ①	 ②	 ③	 ④																	
c 二段屈曲短頸	 ①a										 ①b	 ②	 ③a	 ③b	 ③c	 ④a	 ④b	 ④c	 ⑤	 ⑥a	 ⑥b						
	 ⑦										 ⑧a	 ⑧b	 ⑧c	 ⑧d	 ⑨a	 ⑨b	 ⑨c	 ⑩	 ⑪a	 ⑪b	 ⑫						
	 ⑬										 ⑭	 ⑮a	 ⑮b	 ⑯a	 ⑯b	 ⑯c	 ⑰a	 ⑰b	 ⑱								
d 二段屈曲長頸	 ①										 ②	 ③	 ④	 ⑤	 ⑥	 ⑦	 ⑧	 ⑨	 ⑩								
	 ⑪										 ⑫	 ⑬a	 ⑬b	 ⑭a	 ⑭b	 ⑭c	 ⑮a	 ⑮b	 ⑮c	 ⑯a	 ⑯b						
	 ⑰										 ⑱a	 ⑱b	 ⑲a	 ⑲b	 ⑳	 ㉑a	 ㉑b	 ㉑c	 ㉒a	 ㉒b							
e 微頸ボナ皿	 ①a										 ①b	 ②	 ③	 ④a	 ④b	 ⑤	 ⑥a	 ⑥b	 ⑦								
	 ⑧a					 ⑧b	 ⑧c	 ⑧d	f 微鉢	 ①					 ②	 ③	 ④										
g 3字ボ	 ①											 ②	 ③	 ④	 ⑤	 ⑥	 ⑦	 ⑧	 ⑨	 ⑩	 ⑪						
h 一段屈	 ①											 ②a	 ②b	 ③	 ④	 ⑤a	 ⑤b	 ⑤c	 ⑤d	 ⑥a	 ⑥b						
i 胴張	 ①											 ②a	 ②b	 ③a	 ③b	 ③c	 ④a	 ④b	 ④c	 ⑤							
	 ⑥a											 ⑥b	 ⑦	 ⑧	 ⑨a	 ⑨b	 ⑩a	 ⑩b	 ⑩c	 ⑪	 ⑫	 ⑬					
j ボナ皿	 ①						 ②	 ③	 ④	 ⑤	 ⑥	 ⑦	k 無頸鉢	 ①			 ②	 ③									
l 突ボナ	 ①a														 ①b	 ①c	 ②a	 ②b	 ③	 ④a	 ④b	 ④c	 ⑤	 ⑥a	 ⑥b	 ⑦a	 ⑦b

第1図 晩期浅鉢類の分類

玉縁形状は明瞭であり、その下縁が鋭い鋭角の稜線を成す古相の c ⑮a形(第2図9~19)と、肥厚



第2図 船ヶ谷遺跡出土の未公開等浅鉢(1)

帯の低平化とともに下縁屈曲部が鈍化する c ⑩b形(第2図20～24)に細分可能である。以上の第2図3～24は上記平井編年の岡山県V期と併行するものであり、概ね黒川式新段階、幸泉のStage23に帰属しよう。

第2図25～36は、玉縁肥厚帯の退化が一層進行した一群である。肥厚帯の低平化も著しく、多くは下縁屈曲部に横位凹線状の調整を加えることでその表現を維持している(以下「凹線状調整」と仮称)。同系統の末期を示唆するものであり、幸泉のStage23新から一部Stage24に帰属しよう。

以上は、器厚3～4mmと比較的薄手の例が72%と大半を占める。器面調整は、その大半が横位基調の精緻な研磨調整で仕上げられている。色調は黒褐～褐灰色を原則としており、焼成も、堅致な個体ばかりである。

(2) 玉縁口縁長頸屈曲形浅鉢

つづく第3図には、玉縁口縁長頸屈曲形浅

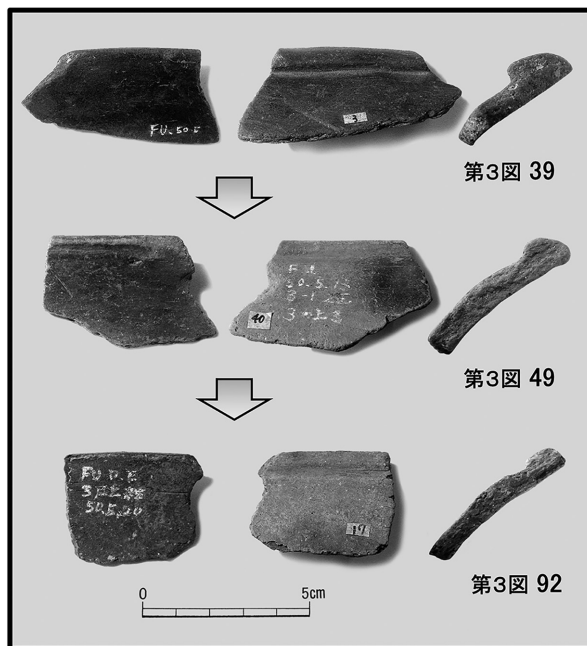
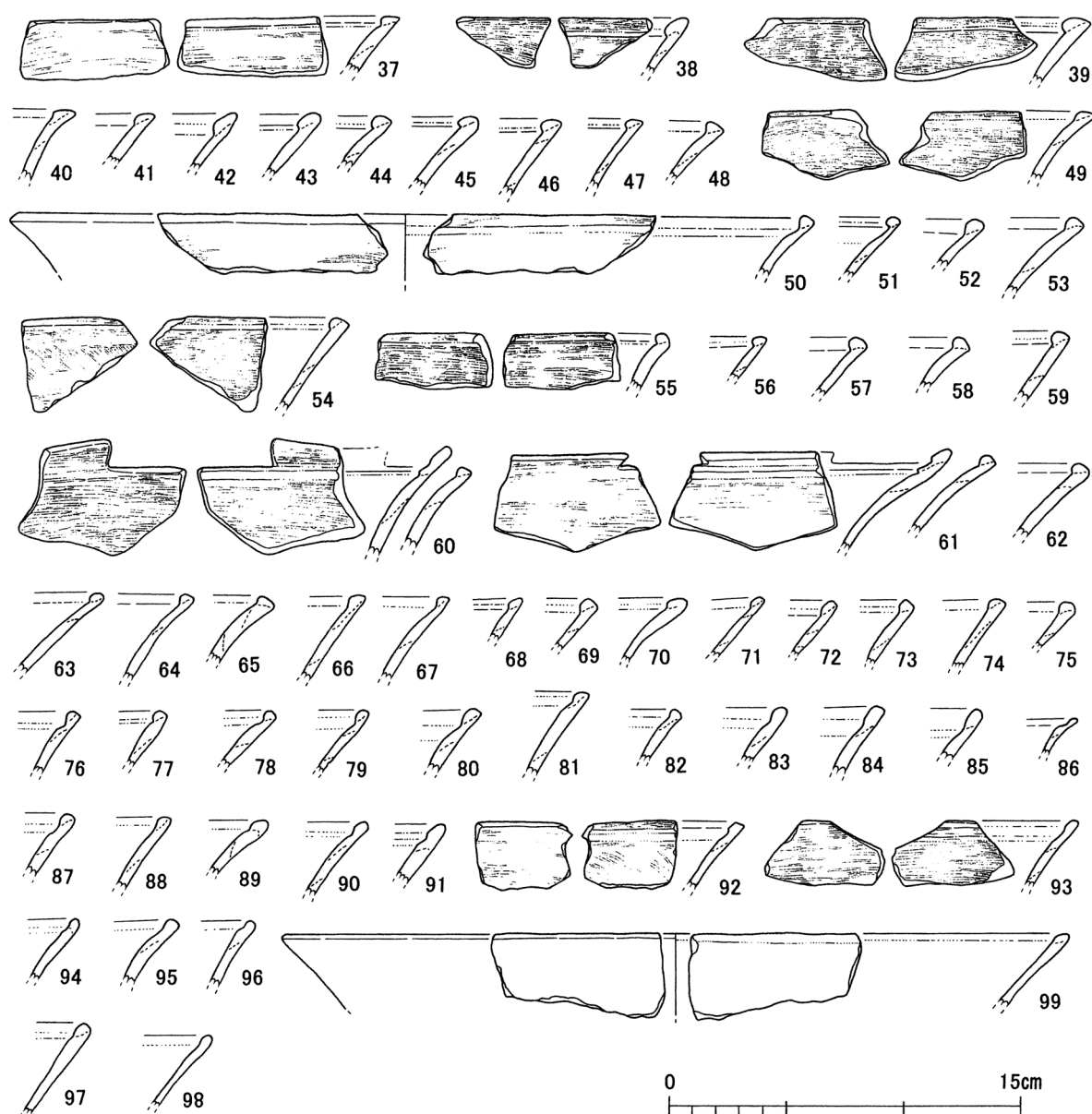


写真2 玉縁長頸屈曲形浅鉢の型式変化



第3図 船ヶ谷遺跡出土の未公開等浅鉢(2)

鉢を示す一群を掲げた。この一群は後述の胴張浅鉢に次いで多いタイプである。ただし小片の場合は先の短頸屈曲形浅鉢との峻別が難しい。器形全体を推測し得る個体も極僅かである。ここでは便宜上、頸部弯曲の弱い一群を長頸屈曲形に分類している。

先の短頸タイプと同様、内縁の玉縁肥厚については三段階程度のバリエーションが窺え、型式細分の指標となり得る(写真2)。

第3図37～39は内縁肥厚帯が相対的に幅広で厚く、断面直角三角形ないしは隅丸三角形様を呈する最古層の一群である(d⑬形)。数は極めて少ない。同じくStage22段階に帰属しよう。

第3図40～62は肥厚帯が萎縮、やや低平化した一群である。断面形状は直角三角形と蒲鉾(玉縁)形があるが、両者は時期差とは捉え難い(d⑭ab形)。Stage23への帰属が想定される。

第3図63～99は玉縁肥厚帯の退化が著しい一群である。うち63～72のように前段との中間形を成すものもあり、型式変化は漸移的だが、玉縁部下縁に凹線状調整を加えはじめる点で区分が可能である。76～99のように凹線状調整のみで肥厚成形を完全に放棄する一群は型式学的にみて、明らかに新相と捉えられよう。左記の短頸屈曲形タイプよりも個体数割合が高く、玉縁口縁長頸屈曲形の約6割を占めている点も留意されよう。以上はStage23新～Stage24に帰属すると想定される。

以上の玉縁口縁長頸屈曲形タイプの器面調整もまた、横位基調の精緻な研磨調整で仕上げられる例が大半を占める。成形は内傾接合を原則とするが、うち65と89は例外的に外傾接合を示している。器厚は4～6mmで全体の83%を占めている。色調は黒～褐灰色、焼成も堅致な個体ばかりである。

(3) 長頸鍵形口縁浅鉢

第4図は、いわゆる長頸鍵形口縁浅鉢のセーリエ上に属する一群である。ただし図示した土器片中では、肩部屈曲部まで遺存する個体はない。ここでは口縁部形状から四段階程度の型式細分が可能である。

第4図100～102は口縁部が萎縮気味に一度、短く内弯したのち再度屈曲し、再び外展する二重屈曲のタイプである。当該組列中の最古相に位置しよう。これらは口縁部のみを観察すると、後述の退化型を示す胴張浅鉢と器形がほぼ共通する。すなわち、先述の玉縁口縁長頸屈曲形の口縁部として、新たに胴張浅鉢の口胴上半部が合体したことで誕生する新器種と認定できるだろう。口縁部の胴張浅鉢形状、および口縁部内縁の、凹線状調整を伴う極めて退化した玉縁口縁の態様から、これらが晩期中葉(後半)末、すなわち、幸泉のStage23新相に帰属するとみられる。

第4図103～107は上記一段目の弯曲部が一層萎縮化し、甘い稜線を形成しはじめる一群である(写真3)。うち105・108は相対的に屈曲が強く、かつて泉拓良が提唱した鍵形口縁に近づいている(泉1990ほか)。ただし泉の鬼塚タイプと比較すると若干内外の屈曲が甘い傾向にある。類例は、同じく松山平野内で隣接する大渕遺跡のA区第5層(栗田編2000ほか)等で複数纏まって出土していることから、船ヶ谷遺跡ではStage24中相の鬼塚タイプを殆ど欠く代わりに、大渕A区第5層段階が同時期を補完している可能性が高いと考えられよう。以上の100～108は黒褐～褐灰色を呈し、器面調整も横位基調の精緻な研磨によって仕上げる個体ばかりである。

第4図下半の109以降は、本稿では上記長頸鍵形口縁形が西部瀬戸内周辺で退化したタイ

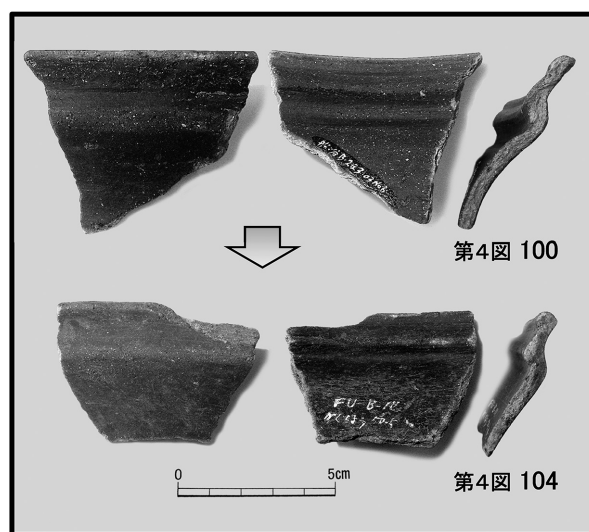
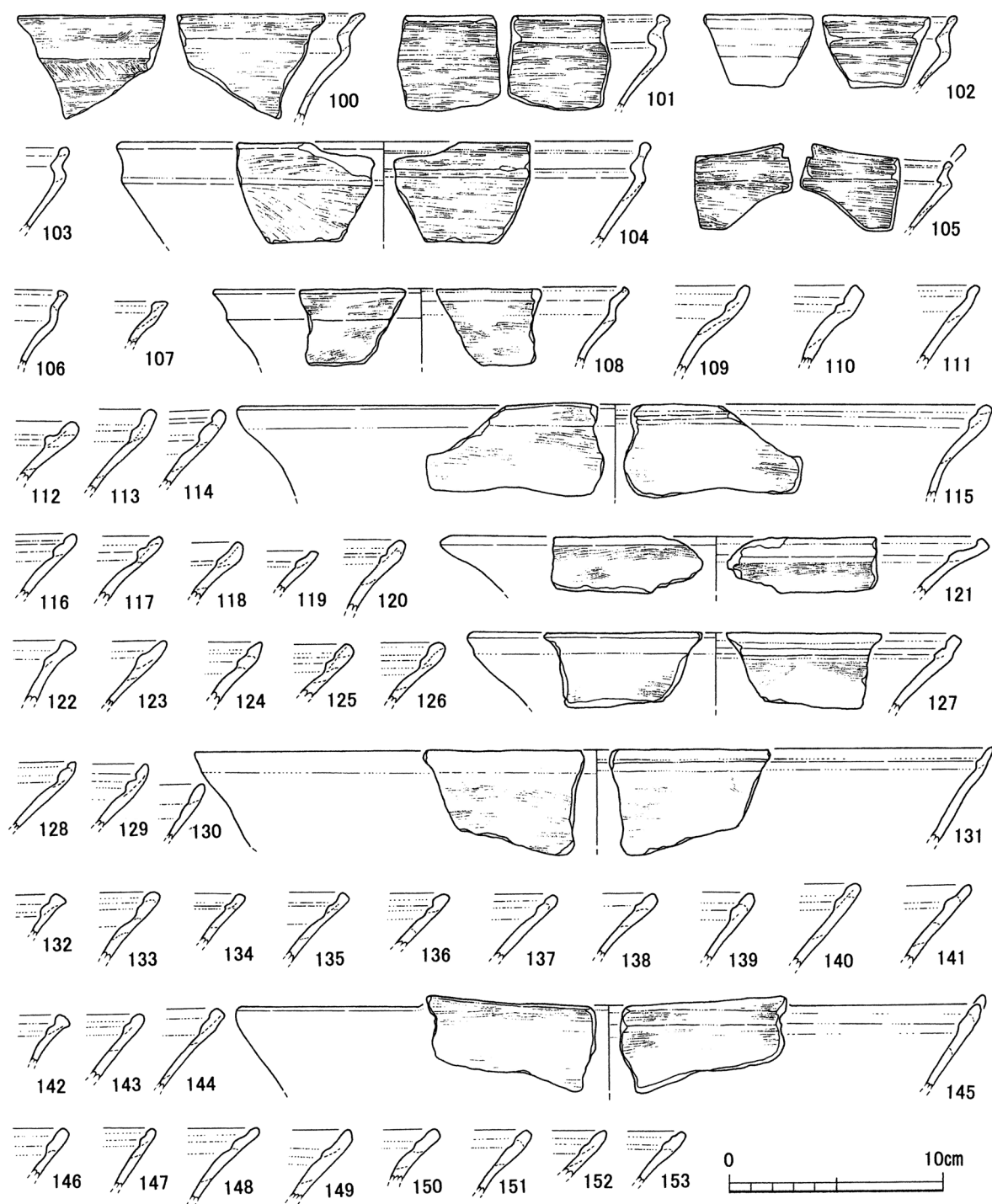


写真3 鍵形口縁浅鉢の型式変化



第4図 船ヶ谷遺跡出土の未公開等浅鉢(3)

プの一群と捉えている。これまでその大半が未公開のままであったが、図示するように船ヶ谷遺跡では本来、数多く出土している。口縁部が内傾屈曲し、その内縁側を縁帯状に肥厚させて横走する凹線状調整二条を加える一群である。この凹線状調整二条は無論、視覚的に鍵形口縁を模した手抜き姿である。器厚は前段の3～4mmから、4mm主体へと若干厚手化するとともに、横位

の研磨調整もまた粗雑化する。さらに色調においても褐灰～暗灰黄色を呈する個体が増加している。

第4図132～153はさらに退化が進行した、西部瀬戸内における鍵形系列末期の一群である。前段のように口縁部外面段(縁帯)状口縁が内折せず直口単純化する点、および内縁の肥厚が低平ないし無肥厚化し、浅い二条の凹線状調整のみが継承された段階と解することができる。器厚の厚手化(4～5mm主体)や研磨調整の粗雑さ、ならびに色調で褐灰～暗灰黄色が目立つ点も前段同様、黒色磨研系浅鉢の崩壊を意味しよう。なお145は例外的に外傾接合を示している。

以上は刻目突帯文成立～前期、幸泉のStage24～25に帰属しよう。

(4) 胴張浅鉢

つづいて胴張浅鉢の一群をみていこう。このタイプでは、頸部の態様に加えて胴部の張り具合が編年の指標となる。ただし第5図に示す通り、未公開資料群は小片が多く、胴部中位以下までが遺存しない個体は型式細分が難しい。

第5図154は船ヶ谷遺跡では異例の土器片である。長い頸部を保ち、口縁内縁は鋭い直角三角形様に肥厚する。内外とも精緻な研磨調整に覆われており、色調も安定した黒褐色を示す。晩期中葉の初期、平井の岡山県Ⅲ期新段階前後に併行する例で、幸泉のStage21に相当しよう。船ヶ谷遺跡資料群のうち晩期最古層に位置する稀有な例である。

第5図155～158・160は先述の玉縁口縁屈曲形の一群と同様、内縁に幅広でしっかりとした断面三角～蒲鉾形の肥厚帯を備える古相の一群である。胴部が球形を成す157と、中位に稜線を設ける158・160の二者が認められる。色調は黒褐～灰褐色で、器面調整は精緻な研磨仕上げを維持する。以上はStage22～23古相に帰属しよう。

第5図159・161～173・177～181・183・184も上記土器群に準ずるが、口縁部内縁の肥厚帯が狭まり、玉縁ないし正三角形様を呈するようになる。色調・調整とも前段から変化はない。これらは先述の玉縁屈曲形との共通性からStage23への帰属が有力視できる。

第5図174～176・182・185～196・198～202は上記一群と口縁部形状が類似するが、胴部の張りが弱まり、緩逆く字状に萎縮化した一群である(写真4二段目)。色調、調整とも前段との差異は窺えない。

第5図197・203～221・225は口胴部全体が短く萎縮化、つまり浅手化した一群である。

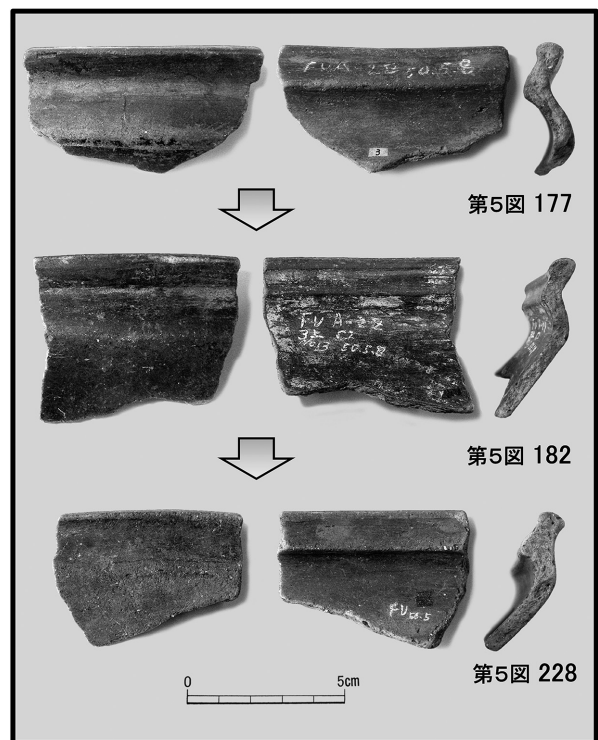
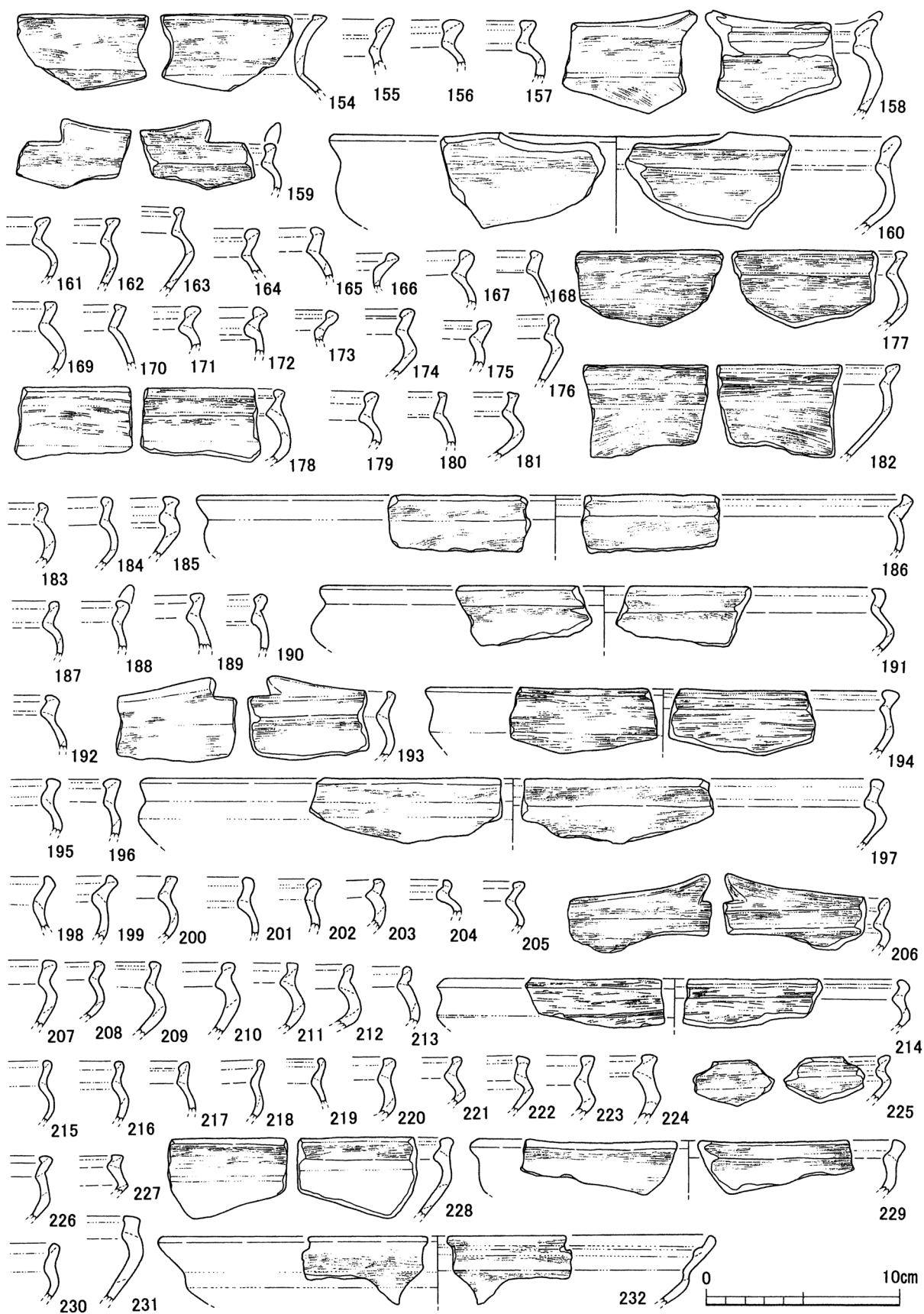


写真4 胴張浅鉢の型式変化



第5図 船ヶ谷遺跡出土の未公開等浅鉢(4)

内縁の肥厚帯も低平化が顕著で、同下端に凹線状調整を加える個体が常態化する。色調は黒褐色を維持する個体も存在するが、この段階で褐灰色を成す例が増加傾向を示すようになる。また203・207・209～213・220のように器厚5～6mm前後の厚手化した個体も目立ちはじめる。以上は玉縁屈曲形や鍵形口縁形浅鉢との共通性から、Stage23新相より一部Stage24への帰属が想定されよう。

第5図222～224・226～232は胴部の張り出しがほぼ失われ、中位の屈曲後、口縁にかけて逆く字状浅鉢成立に向けた一体化が進行した段階である(写真4下段:幸泉2017,p86の「OS3期」参照)。内縁の肥厚帯も227～231のように大半が形骸化し、凹線状調整を加えるのみとなる。色調は褐灰色やにぶい橙色を示すようになり、器面調整も粗い研磨を原則とするようになる。以上は福岡県北九州市長行遺跡(山口1983)や粕屋町江辻遺跡第四地点(新宅編1998)等に類例があり、Stage24前半段階への帰属が想定できよう。

以上の胴張浅鉢の成形は内傾接合を原則としつつ、一部水平接合を採用する。ただし頸胴界域(屈曲部)に関しては、必ずといってよいほど意図的な水平接合で収める傾向にある。器厚は3～4mmの例が同系統全体の80%に達している。

(5) 素口縁一段屈曲形浅鉢

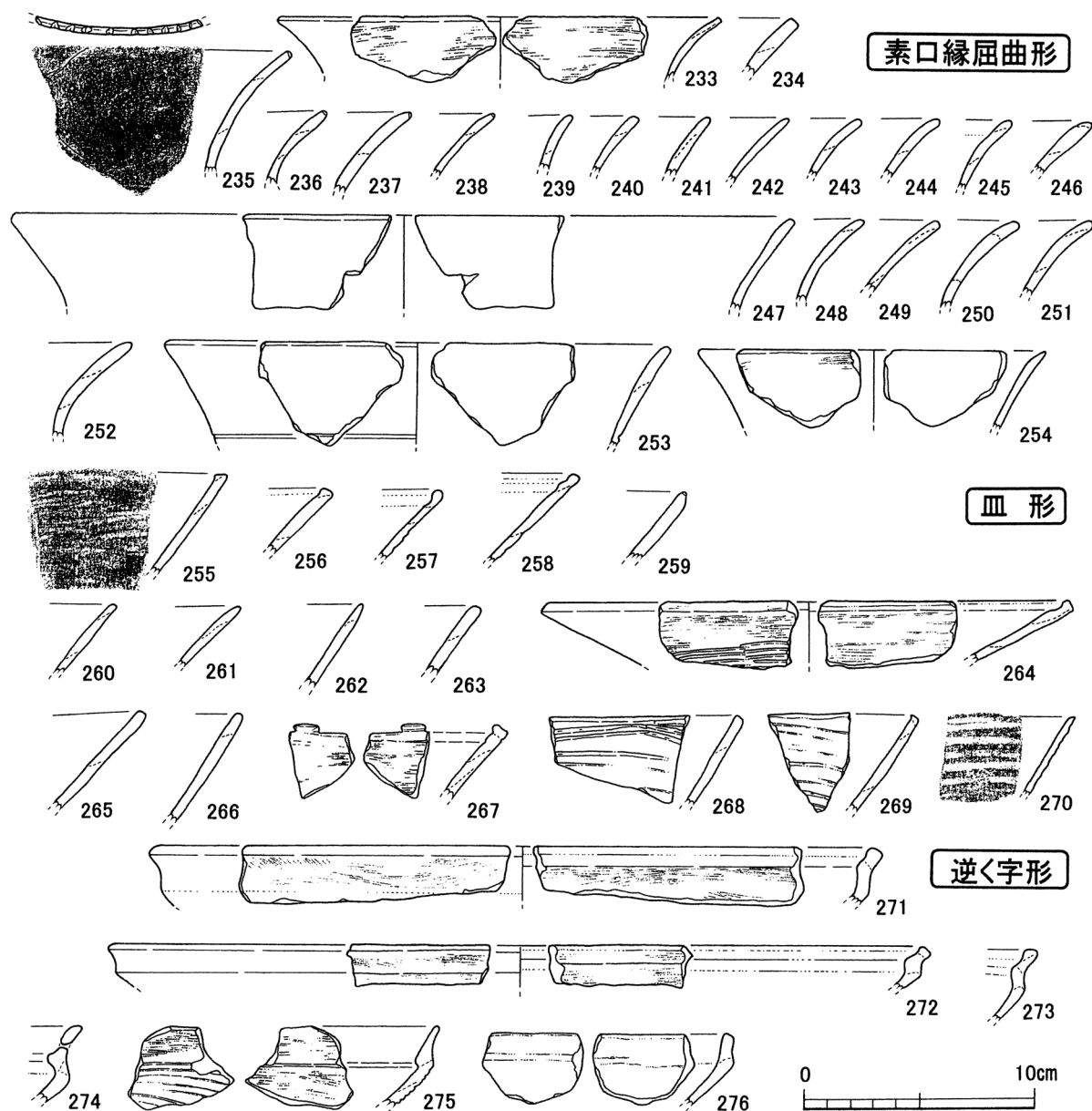
第6図上段は素口縁一段屈曲形浅鉢の一群である。浅鉢中に占める組成率は8.9%と比較的少ない。やはり小片が多く、頸部長や肩部屈曲の態様が不明な個体ばかりである。なお253は頸部界域に横走沈線一条を配する例で、屈曲そのものが省略されている。235～237は口唇部に刻目を伴う例である。数は少ないが、これら素口縁一段屈曲浅鉢が深鉢の上下圧縮されたデザインを念頭に成形された器種であることが想定されよう。

以上の器面調整は233のように内外全面に精緻な研磨調整を加える例もあるが、これは稀であり、多くは粗い研磨ないしナデ調整で仕上げられている。ただし器壁は薄く、3～4mmの例が同系統全体の80%を占める。色調も黒褐～灰褐色を呈することから、これら一段屈曲タイプの一群もまた黒色磨研系の一派と認識すべきであろう。

(6) 皿形浅鉢

第6図中段は深皿形の一群である。うち255～257・264は内縁に凹線状調整を加える未肥厚の玉縁肥厚を、258は鍵形末期と通ずる二条凹線状調整を加える。すなわち、これらについては幸泉のStage23新～Stage24段階に伴うと想定されよう。267は小振りのボタン状突起が口唇上に伴う古相の事例。鳥根県大田市古屋敷遺跡(伊藤・柳浦編2017)や飯南(旧頓原)町の板屋Ⅲ遺跡(角田編1998)等に類例がある。Stage22～23古相に比定できよう。

これら皿形の成形は九州の組織痕土器のように型成形ではなく、内傾接合による輪積成形を採用している。器厚は3～4mmを原則とする。色調は黒、黒褐、灰褐、にぶい橙色とバリエーション豊富である。調整については粗い研磨ないしナデを基調とするが、255・264・268・269のように外器面に粗い二枚貝条痕を残し、粗いミガキ調整で仕上げる例や、270のように二枚貝条痕をその



第6図 船ヶ谷遺跡出土の未公開等浅鉢(5)

まま残す例も散見できる。後者の粗製の一群は、後述するボウル・ナベ等の加熱調理具の一種と認識されよう。

(7) 逆く字形浅鉢

第6図下段は逆く字形とその祖型を成す一群である。うち271～273は内縁に凹線状調整を伴う未調整の玉縁帯を保っており、各部位の屈曲も鋭利である。Stage24前半に収まろう。色調は黒褐～褐灰色を呈する。275もまた内外の屈曲が鋭利さを維持しており、かつ胴部は先述した皿形例と同等の二枚貝条痕後研磨調整で仕上げていることから、Stage24を降る可能性は低いだろう。対する276は屈曲が甘く、口縁部も直立するなど、新しい特徴を備えている。内外はナデのみで

粗く仕上げられており、色調も明るい灰黄褐色を基調としている。器厚も5mm前後と厚手である。Stage25への帰属が想定されよう。

(8) ボウル・ナベ形粗製浅鉢

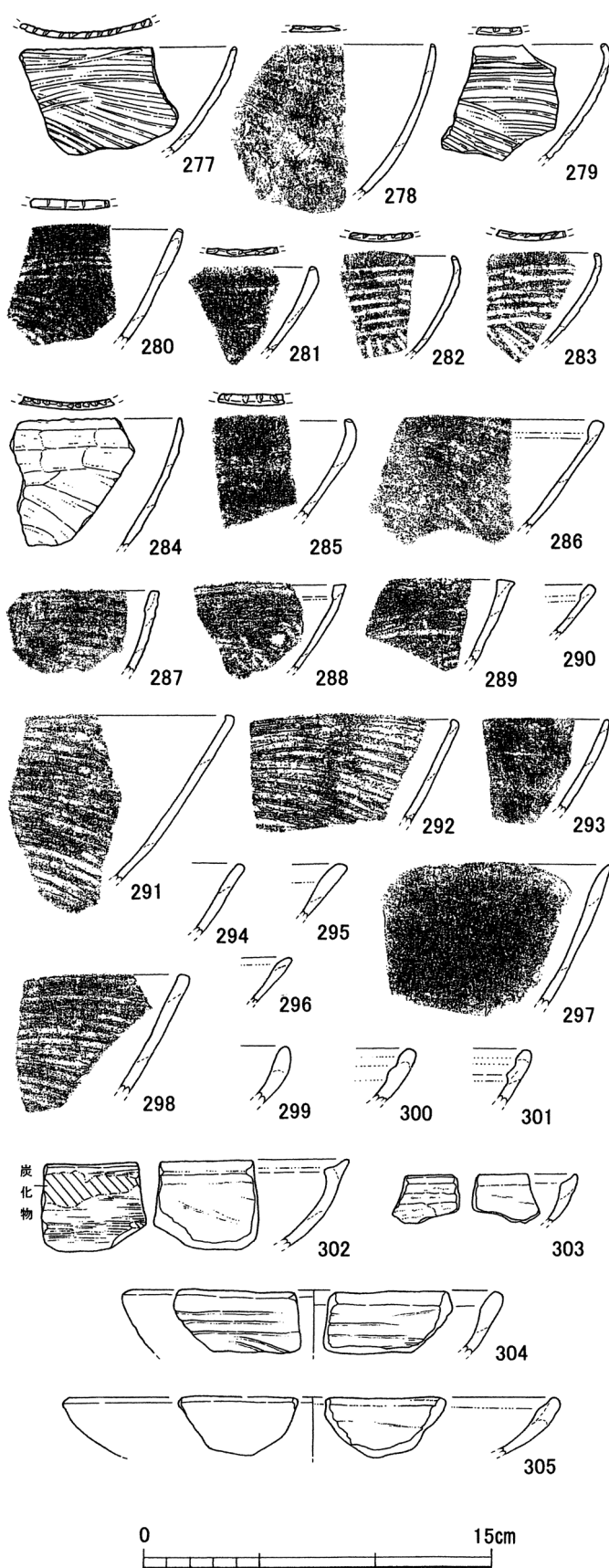
第7図は粗製のボウル・ナベ形浅鉢群である。ここでもいくつかのバリエーションが窺える。

第7図277～285は口唇を刻むタイプである。外器面は284がケズリ、278・281・285がナデであるほかは、二枚貝条痕を明瞭に残している。また器厚が3～4mmで同系統全体の93%を占め、全般に薄い。以上の特徴は伴出する粗製深鉢の胴部調整と通ずるものがあり、これら粗製浅鉢が加熱処理を目的とした調理具であることを暗示している。色調も褐灰～にぶい褐色と、黒色磨研系とは一線を画している。

第7図286～290は内縁に肥厚帯を設ける内肥ボウル・ナベ形のタイプである。291・292も上記一群と類縁しよう。これらの外器面でも二枚貝条痕が顕著であり、色調も褐灰～にぶい黄橙色を示す。同じく加熱調理具として認識されよう。

第7図293～298は素口縁のボウル・ナベ形である。内縁がやや肥厚する295～297は後述の浅ナベタイプとも通じよう。291・292・298の外器面は明瞭な二枚貝条痕、その他はナデ調整のままであり、これらもまた加熱調理具である可能性が高いであろう。色調は灰褐～褐灰色である。

第7図299～305は浅手のボウル・ナ



第7図 船ヶ谷遺跡出土の未公開等浅鉢(6)

ベ形タイプである。推定口径は304が21.0cm、305が27.8cmであり、これら一群は全般に小形器種である可能性が高い。300・301は二条の凹線状、また302・303は一条の凹線状調整を加えている。304・305は内縁肥厚のみで収める。先の鍵形や胴張退化形と時期的に併行関係にあらう。以上の一群もまた器面調整は粗く、303の外面段(縁帯)状口縁にはケズリ調整痕が(後節写真5)、304の内外と305の内面には二枚貝条痕が残る。さらに302の外縁には黒化した炭化物の付着が顕著であり、これらもまた調理具としての用途が想定されよう。色調は灰褐～灰黄褐色を呈している。

3. 製作技法等に関する若干の補足的考察

以上紹介してきた浅鉢群には、さらに胎土、色調、成形、調整の各属性においても一定のバリエーションが窺知できる。そこで以下、第2～7図掲載の浅鉢全点を対象に、若干の分類と考察を加えておこう。

(1) 船ヶ谷式浅鉢の胎土について

最初に胎土である⁵⁾。観察集計の結果、船ヶ谷式浅鉢については、(A)粒径1～2mm以下で長石・石英を含むタイプ、(B)粒径1～2mm以下で長石・石英・金雲母等を含むタイプ、(C)粒径1～4mm以下で長石・石英・銀雲母等を含むタイプ、(D)粒径1～2mm以下の花崗岩の混和が認められるタイプ、(E)粒径2mm以下で赤色斑粒の混和が認められるタイプ、(F)粒径1mm以下で角閃石の混和が認められるタイプの6パターンを確認できた。なかでも(A)～(C)の3パターンが圧倒的に多い。

一方で、花崗岩、赤色斑粒、角閃石の混和が認められる例は、極僅かである。特に(F)の「角閃石の混和が認められるタイプ」は2点のみであった。具体的には角閃石・金雲母・石英等を含む第3図39と、石英・長石・角閃石等を含む第5図212が該当する。これら2点は外来系と判断されよう。なかでも第3図39は優美な漆黒色を呈し、焼成も頗る堅致である。晩期中葉の古い段階における、東九州方面からの搬入品を示唆する可能性が想起されよう。

このほか花崗岩の混和が特徴的に看取される第5図177もまた、特に精製度が高い優品といえる。ただしその胎土は領家帯由来であり、瀬戸内圏内部での製作が予想される。隣接する瀬戸内地方内部の小地域圏から搬入された可能性が高いであろう。

以上のように、胎土観察結果から外来系と判断できる土器片は極僅かであることが把握できた。このことは、船ヶ谷式浅鉢の大半が在地周辺の領家帯内で製作されていたことを暗示するものである。

(2) 船ヶ谷式浅鉢の色調について

つぎに色調である⁶⁾。対象資料群全点の比較観察結果により(a)黒色(5YR2/1、7.5YR2/1～10YR2/1、N1.5/0～N2/0)、(b)黒褐～褐灰色(2.5YR3/1、5YR3/1～5YR4/1、7.5YR4/1～7.5YR4/2、10YR3/1～10YR4/1)、(c)灰黄褐～にぶい黄橙色(10YR4/2～10YR7/3)、(d)灰褐～にぶい褐色(7.5YR5/2～7.5YR5/3)、(e)にぶい赤褐色～にぶい橙色(5YR5/3～5YR6/3)、(f)黄灰～暗灰黄

色(2.5YR4/1～2.5YR4/2、2.5YR5/1)の6パターンを認識できた⁷⁾。うち船ヶ谷では「黒褐～褐灰色タイプ」が主流を占める。しかしながら、左記の一般的な色相系統に紛れて、10YRないし7.5YR相の橙色や、黄色系統を示す個体も散見できた。後者を器種別に捉え直すと、精製のボウル・ナベ形に加え、比較的単純な器形を成す素口縁屈曲形や皿形、逆く字形に、そうした傾向が高いことを指摘できる。

(3) 船ヶ谷式浅鉢の成形法について

つづいて成形法である。輪積ばかりであり、型成形は判別できなかった。内訳は内傾接合84.6%、水平接合5.6%、外傾接合1.0%、不明8.9%で、内傾接合が圧倒的多数を占める。また器厚は3mm以下が41.5%、4mmが31.7%、5mmが15.0%、6mmが11.1%、7mmが0.7%で、浅鉢では3～4mmが全体の73.2%を占めることが判明した⁸⁾。

外器面の最終器面調整については、横位の研磨仕上げを原則とするが、ナデ7.9%、二枚貝条痕6.2%、ケズリ0.7%を含む。もっとも、こうした器面調整法の違いは本来、器種型式や用途の違いを反映するものであり、各々は、原則それらと連動するものと考えられよう。ただし黒色磨研系はStage25に向けて退化と崩壊の方向を示しており、こうした新相段階においては、器面調整の手抜き化も同時に指摘される。具体的には、退化傾向を示す黒色磨研系浅鉢に粗い研磨のまま放置する例が目立った。また図示したように、粗製のボウル・ナベ・皿形の一部では外器面に二枚貝条痕やケズリ、搔取り調整等を意図的に残し、器表面を多孔質化させる例がほぼ普遍的に認められた。

(4) 船ヶ谷式浅鉢に関する個体数調査結果

以上の、浅鉢に関する観察所見に加えて、最後に既存の報告済み資料群(阪本編1984、栗田編2000)を加えた出土浅鉢口縁部片総数の個体数識別調査も実施した⁹⁾。第8図は、その成果を集計したものである。同図から、船ヶ谷遺跡の浅鉢は第2・3図で示した玉縁口縁屈曲形浅鉢群が浅鉢全体の26.9%と最多を占めていることが判る。同時に、第5図掲載の胴張浅鉢も25.4%と極めて拮抗している。また両者の折衷を意図して創出されたとみられる長頸鍵形口縁浅鉢の組列群が16.9%とこれらに次ぐ。以上の3器種で浅鉢全体の69.2%にまで達しているが、さらに少数派を占める素口縁一段屈曲形8.9%と、精製皿形の一部2.6%を加算すると、浅鉢全体の約8割が黒色磨研系の盛付容器ということになる。ここで、逆く字浅鉢3.6%が刻目突帯文成立～前期、幸泉のStage25に降ることを鑑み、これを一端除外するならば、残り約2割が調理具たる粗製ボウル・ナベ形ということになる。

4. 成果とまとめ

以上本稿では、これまで未公表であった船ヶ谷式浅鉢のうち、合計305点に及ぶ新規の図示公開を果たすことができた。そしてこれらの地道な作業を経ることでようやく、船ヶ谷式浅鉢本来のセット関係を復元できたのである¹⁰⁾。以上の新成果の導出により、今後の研究展望もまた大き

器種 口唇文	浅鉢								小計
	玉縁屈	鍵形	胴張	一段屈	精製ナベ等	粗製ナベ等	皿形	逆く字	
口唇無文	126(26.7%)	80(16.9%)	120(25.4%)	38(8.1%)	21(4.4%)	26(5.5%)	24(5.1%)	16(3.4%)	451(95.6%)
口唇上刻	1(0.2%)			4(0.8%)		15(3.2%)		1(0.2%)	21(4.4%)
口縁内刻									0(0%)
口唇外刻									0(0%)
小 計	127(26.9%)	80(16.9%)	120(25.4%)	42(8.9%)	21(4.5%)	41(8.7%)	24(5.1%)	17(3.6%)	472

第8図 船ヶ谷遺跡出土浅鉢の個体数識別調査結果

形(c ⑬～⑱形、d ⑪～⑮形)、長頸鍵形口縁形(d ⑯～⑳形)、胴張浅鉢(i 形)、素口縁一段屈曲形(h ①～⑤b形)、逆く字形(h ⑤cd形・i ⑫～⑬形)と、加熱調理用具たる組成のボウル・ナベ形と皿形の一部(j 形)の二者に大別できた。これは、晩期浅鉢のなかにみる「精製」と「粗製」に対する再認識でもある。なかでも後者の粗製浅鉢群は、従来の学界では殆ど関心が示されてこなかった一群であり、これまでの報告書等でも大部分がピックアップされてきた。こうした加熱調理用具としてのボウル・ナベ・皿形浅鉢は、瀬戸内地方では縄文後期前葉のStage 5 前後から多彩に展開しており(幸泉2010ほか)、従来の「浅鉢＝盛付容器」といった固定概念を捨て去る必要があろう。資料群そのものの観察を通じて、議論を進展させていくことが肝要である。またこうした粗製浅鉢における二枚貝条痕やケズリといった製作技法は、被熱部位に対する器壁の意図的な多孔質化を目的とした行為であり、共伴深鉢の胴部調整とも相通じていることから、隣接する九州地方の組織痕土器や一部のアバタ系浅鉢とは一線を画するべきであろう。けれども、加熱効率の向上を目的とした多孔質化といった観点からは互いに通底し合う部分もあり、従来、学界が踏み込むことの稀であった当該期浅鉢群の機能、用途論や具体的な調理法へのアプローチを今後模索し、追求を重ねる上で、両者の関係についても看過すべきではない。

以上のような視点で観察するならば、前者の精製黒色磨研系に属する各器種は、器体の表裏面を精緻に磨き上げ、炭素吸着処理で仕上げていることから加熱行為とは無縁である。従って、その大部分が盛付容器としての機能を果たしているという認識に異論はない。左記一群のうち船ヶ谷浅鉢の一翼を成したのが玉縁口縁屈曲形浅鉢群(第2・3図)である。近畿～山陰東中部や瀬戸内東中部で主勢を成す。一方で看過できないのが、胴張浅鉢(第5図)の存在であろう。個体数識別調査の結果、両者は西部瀬戸内において数量的に拮抗していた(第8図)。後者は九州～西中国、南四国域で組成率が高くなる。両者はその地理的分布上において排他的な対立関係を示すものではないが、従来、各々が編年指標としてのみ研究対象とされてきた側面が強い(宮地2008ほか)。実は、こうした組成率に関する地方差が内包する意味合いについても依然、纏まった研究実績が存在しないのである。用途差を育む背景としての食材、料理内容の違い等が想定されるところであり、広く民俗、民族、文化人類学的視座の援用や、近年の有用植物等検出事例の時空間的推移も加味しつつ、今後一層その解明が求められるところであろう。

つづいて製作技法である。船ヶ谷遺跡では、浅鉢においても物理的移動の大部分が領家帯内部、すなわち瀬戸内海沿岸域のうちに留まることを見出せた。このことは重要な意味を持つ。何故なら刻目突帯文成立前後のStage22～25段階において、これまでの編年研究史上、広域的な類似性が強調されてきた黒色磨研系浅鉢に関しても、少なくとも西部瀬戸内では、隣接する東北部九

く広がるものといえるだろう。

浅鉢は、大きく精製黒色磨研系の盛付容器群、すなわち玉縁口縁屈曲

州や山陰中部、あるいは南四国や東南四国側からの土器移入は例外的存在に留まっていた可能性を指摘できるからである。また成形法に関しても、九州地方のような型成形は認められず、むしろ後期以来の伝統的な輪積成形を基本とする内傾接合が、圧倒的主体を占めることを客観的に示すことができた。加えて、色調や器面調整法の検討結果からは、西部瀬戸内周辺における浅鉢編年の新たな指標を抽出できる可能性すらあろう。

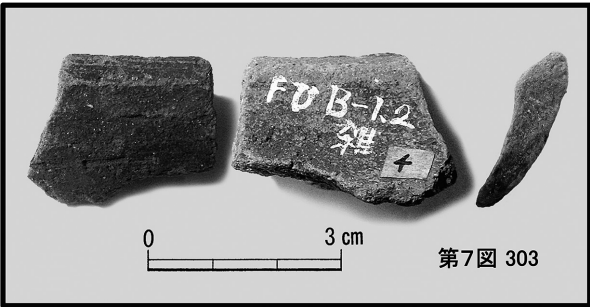


写真5 粗製浅鉢に対する認識

以上、本稿では船ヶ谷式浅鉢の全貌に関して、研究基盤を成す成果を公表することができた。今後、分析の対象を拡充させることで、晩期後半の刻目突帯文成立期前後をめぐる様々な新事実が明らかにされることだろう。西部瀬戸内周辺の縄文晩期資料群を今一度、有意の視座から入念に観察し、比較し直す姿勢が求められているのである。

(2021年4月28日)

註

- 1) 宮地聡一郎は刻目突帯文期について「広域編年研究を目指すのであれば、地域性のある深鉢の比較ではなく、精製器種である浅鉢を軸にとらえた方法が得策である」と述べている(宮地2008,p807)。
- 2) 愛媛県教育委員会「30教文第250号」ほか認可済。このうち底部および深鉢・鉢口縁部片については、既に先行して公表を済ませたところである(幸泉・岩田2019、幸泉・岩田・奥田・白鳥・近藤2020)。なお、本稿では3-(1)胎土に関する考察は愛媛大学法文学部4回生の奥田七夏が、また3-(2)の色調に関する考察は同学部3回生の畑中志穂が、さらに3-(3)器厚に関する分析集計は笠木聖郁がそれぞれ幸泉指導のもとで執筆した。白鳥嶺は本稿全体の編集、校正作業を補助している。その他の箇所については、学生たちの意見や観察所見を汲みつつ、幸泉が分掌、統括した。
- 3) 幸泉2014文献p94の第2表 ※1を参照。
- 4) 西日本内部の広域比較を行うにあたり、2017年以降、幸泉は複雑多岐にわたる地方型式名を多用する代わりにStage 1~28の統一基準を設け、表現することを提唱している(幸泉2017ほか)。第9図参照。
- 5) 愛媛大学法文学部生、奥田七夏の調査結果に基づく。
- 6) 愛媛大学法文学部生、畑中志穂の調査結果に基づく。
- 7) 小山正忠ほか編2014『新版標準土色帖』36版、(株)日本色研事業より分析。
- 8) 愛媛大学法文学部生、笠木聖郁の調査結果に基づく。
- 9) 同一個体片は全て1点としてカウントした。もっとも、前号で報告した深鉢総数144点に対して、今回の浅鉢472点は全器種中の約7割を占めることとなり、実態を超越している可能性が高いと推察される。現資料群に対する調査法の限界を示すものでもある。しかし少

統一時期	相対年代(縄文-弥生)	東・南九州周辺	中・北部九州周辺	周防灘沿岸～瀬戸内周辺	南四国周辺	近畿南西域周辺
Stage17	後期後葉(新)	御領併	御領・(上唐原了清)	岩田第三～陽弓	宮滝2併	宮滝2
Stage18	後期末葉(古)	上加世田・(中居Ⅱ)	天城・広田(古)	北井門～岩田第四(古)	(姫野々上町古)	滋賀里1
Stage19	後期末～晩期初頭	入佐Ⅰ	古閑Ⅰ・広田(新)	岩田第四(中～新)・坂口併	(姫野々上町新)・上ノ村	滋賀里2(西坊城Ⅰ～Ⅱ)
Stage20	晩期前葉	入佐Ⅱ(古)～(新)	古閑Ⅱ(古)～(新)	岩田第四(末)～川棚条里併	稲持4併・八反坪・中村Ⅰ-2	滋賀里3a(大泉～秋篠)
Stage21	晩期中葉(古)	黒川(古)	黒川(古)併	篠原(古)併	(居徳SR2)・中村Ⅰ-3	篠原(古)
Stage22	晩期中葉(中)	黒川(中)	黒川(中)併	持田・篠原(中)併	中村Ⅰ-4	篠原(中)
Stage23	晩期中葉(新)	黒川(新)	黒川(新)併	谷原・船ヶ谷	(居徳5A区古)	篠原(新)
Stage24	晩期後葉 (刻目突帯文成立期)	(松源)・千河原	(流末清田SX01)	神谷川～前池・大淵	(居徳4D区古)	滋賀里Ⅳ(鬼塚)
Stage25	弥生早期(古) (晩期末葉)	(上中段)	曲り田・山ノ寺併	(津島岡大23次河邊2)併	中村Ⅱ(古)	口酒井

第9図 時期基準の統一

なくとも、当該数値は、船ヶ谷土器群では浅鉢が卓越するという器種組成上の特質をある程度は反映するものと捉えることはできよう。

10) もっとも既に幸泉が谷尻系土器群の検証のなかで論述しているように、当該資料群はStage23(晩期中葉後半)を主体としつつも、連続する前後時期の資料を一定量含んでいる(幸泉2020a、幸泉・岩田・奥田・白鳥・近藤2020)。セット関係の詳細については今後の資料増加を待って、再度議論を深める余地が残されている。

参考文献

- 泉 拓良1990「西日本凸帯文土器の編年」『文化財学報』第八集、奈良大学文化財学科 pp.55-79
- 伊藤 智・柳浦俊一編2017『古屋敷遺跡(A・E区)』島根県教育委員会
- 角田徳幸編1998『板屋Ⅲ遺跡』島根県教育委員会
- 栗田茂敏編2000『大淵遺跡－1・2次調査－』松山市埋蔵文化財センター
- 幸泉満夫2010「四国」『西日本の縄文土器 後期』真陽社 pp.69-112
- 幸泉満夫2014「博物館資料学の新たな可能性－地域に眠る出土文化財の新たな活用システム構築に向けて－」『法文学部論集 人文学編』第37号、愛媛大学法文学部 pp.87-126
- 幸泉満夫2017「縄文文化解体期をめぐるとる土器資料群の研究1－北部九州沿岸域における“文様のない粗製深鉢群”の再検証－」『古文化談叢』第79集、九州古文化研究会 pp.57-118
- 幸泉満夫・岩田堯之2019「愛媛県周辺域における未公開縄文土器群の研究(3)－未報告の船ヶ谷式土器底部資料について－」『人文学論叢』第21号、愛媛大学人文学部 pp.143-150
- 幸泉満夫2020a「谷尻式土器の研究(下)」『縄文時代』第31号、縄文時代文化研究会 pp.79-101
- 幸泉満夫2020b「未評価出土文化財をめぐるとる博物館資料学の実践研究(2)－(中篇)－」『法文学部論集 人文学編』第49号、愛媛大学法文学部 pp.51-82
- 幸泉満夫・岩田堯之・奥田七夏・白鳥嶺・近藤拓弥 2020「未公開の船ヶ谷式土器群をめぐるとる基礎的研究(1)」『愛媛考古学』第24号、愛媛考古学協会 pp.39-48
- 幸泉満夫2021「未評価出土文化財をめぐるとる博物館資料学の実践研究(2)－(後篇)－」『法文学部論集 人文学編』第50号、愛媛大学法文学部 pp.61-82
- 阪口 隆1995「第3章 縄文時代」『持田町3丁目遺跡』愛媛県埋蔵文化財調査センター pp.13-44
- 阪本安光編1984『松山市・船ヶ谷遺跡』愛媛県教育委員会
- 新宅信久編1998『江辻遺跡第四地点』福岡県粕屋町教育委員会
- 平井泰男2009「岡山県における縄文時代晩期前半の土器様相」『研究報告』29 岡山県立博物館 pp.1-34
- 宮地聡一郎2008「凸帯文系土器」『総覧 縄文土器』アム・プロモーション pp.806-813
- 宮本一夫1989「第5章 道後平野における弥生時代開始期の動向」『鷹子・樽味遺跡の調査』愛媛大学埋蔵文化財調査室 pp.77-93
- 山口信義ほか編1983『長行遺跡』北九州市教育文化事業団埋蔵文化財調査室
- 脇坂光彦1976「芦品郡新市町神谷川遺跡の資料」『地歴部誌』第4号 府中高校生徒会地歴部 pp.6-22

挿図版典拠

第1図:幸泉作成、第2～7図:幸泉指導のもと考古Ⅱゼミ生実測、博物館実習Ⅰ(文系)履修生採拓、幸泉編集清浄、第8図:ゼミ生達の観察所見等をもとに幸泉作成。写真1～5:幸泉撮影・レイアウト(掲載許可済)。